埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

Significance of Communicative English with Teaching Child English: Pedagogical Phonetic Consideration to a Survey on Students' English Proficiency for Japanese Teachers of English

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大山, 健一 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1529

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

児童英語教育における
英語コミュニケーションの意義
── 日本人英語指導者のための
学生英語アンケート調査による教育音声学的考察 ──

大　山　健　一

Abstract

This paper proposes how communicative English is significant in terms of teaching child English. In Japan, nursey schools and kindergartens have been the place children meet English, because elementary schools are where people need to learn English from 2020. According to the study of education improvement, to acquire English communicative skills is significant in branch of methods in teaching child English relative not only to elementary schools but also to nursey schools and kindergartens. Such skills, however, are not necessarily fruitful enough to teach child English. This is mostly because teachers carry out child English classes and activities from asymmetrical educational viewpoints of only curricular demands instead of students' ones. When they were in nursery schools and kindergartens as well as in elementary schools, it is necessary to recognize child English, which students possibly wanted to study. For their demands, pedagogical phonetics, which links English phonetics to English education, can function as the linguistic joint among nursery schools, kindergartens, and elementary schools, leading to one of the answers that help teachers to teach communicative English. The consideration can be a sort of references to curriculum development for both methods in teaching child English and teacher training.

キーワード：教育改善研究，カリキュラム開発，児童英語教育，教育音声学，初等英語科教育法
Keywords: Study of Education Improvement, Curriculum Development, Teaching Child English, Pedagogical Phonetics, Methods in Teaching Child English

1. 目　的

本論文は,「児童英語教育」(Teaching Child English) において如何にして「英語コミュニケー

ション」（Communicative English）が必要であるのかを提唱している。日本の小学校では 2020 年度より英語を学習する必要性が生じているため，保育園や幼稚園も英語に触れる機会が得られる場になりつつある。「教育改善研究」（Study of Education Improvement）としては，「小学校英語教育」（Teaching English in Elementary Schools）だけではなく，「児童英語教育」を見据えた英語のコミュニケーションスキルを習得することは「初等英語科教育法」（Methods in Teaching Child English）において必要とされている。しかしながら，このスキルは必ずしも英語を教えるのに十分な実りあるものではない。その理由に挙げられるのは，指導側が学生（当時の児童）の需要の代わりに，カリキュラム上の需要のみの教育的な一側面で授業・活動展開をしているためである。「小学校英語」（English in Elementary Schools）だけではなく，学生が保育園や幼稚園で学びたかった「児童英語」（Child English）は，どのようなものであるのかを認知する必要性が考えられる。このような需要において，「英語音声学」（English Phonetics）に「英語教育学」（English Education）を加えた「教育音声学」（Pedagogical Phonetics）の視点から，指導側が「英語コミュニケーション」を教える際の手助けとなり得るためには，「児童英語教育」は保育園から，幼稚園，小学校への言語学的繋がりとして働き掛けることが可能である。よって，「カリキュラム開発」（Curriculum Development）を基に，日本人が「児童英語」を教える際に注目しなくてはならない点は何であるのかを提唱する。

2. アンケート調査

2.1. 調査協力者

「小学校英語」を対象とした先行研究である大山（2021）を参考に，大学生 2 年生に対して，2022 年 7 月に計 2 クラスでオンライン形式のアンケート調査を実施した。全てのクラスが小学校教諭希望，幼稚園教諭希望，保育士希望を主とし，資格取得において英語が必修科目であった。

対象学生は計 77 名（男性：6 名，女性：71 名）で，実施大学の倫理規定に従い，事前に授業評価には関係ないことを周知した上で，合意の際にはアンケートに回答してもらうこととした。

2.2. アンケート項目

アンケート項目は 3 つに大別され，基礎アンケート，選択式アンケート，自由記述式アンケートである。表 2-1 が項目の内容である。

基礎アンケートは 3 つの文章に対して，基礎的な内容を求めている。選択式アンケートは 14 つの文章に対して，5 段階評価（①そう思う，②少しそう思う，③どちらとも言えない，④あまりそう思わない，⑤そう思わない）である。一方，自由記述式アンケートの 2 つは率直な学生の意

表 2-1　アンケート項目

基礎アンケート	1．小学校の先生，幼稚園の先生，保育士のうち，将来なりたいのはどの職業ですか？（複数回答可） 2．英語は好きですか？（選択式） ①⇒とても好き　②⇒少し好き　③⇒どちらでもない ④⇒あまり好きではない　⑤⇒全く好きではない 3．今まで受けてきた中で記憶に残っている英語の授業はどのようなものでしたか？（自由記述式）
選択式アンケート	1．2020 年度から小学校で英語の授業が増えたのは遅い 2．2020 年度から小学校 3・4 年生では週 1 時間，5・6 年生では週 2 時間が増えたのは少ない 3．2020 年度から英語の授業は，小学校 3 年生から開始となったが，小学校 1 年生から開始する方が良い 4．小学校での英語の授業は，主に身近な内容を題材にするが，中学校の前段階となる授業内容の方が良い 5．英語の授業は，小学校では主に音声を中心とした内容であるが，中学校でも文法よりも音声を中心とした内容の方が良い 6．中学校受験を予定している児童も考えると，小学校での英語の授業では，身近な内容と音声中心の内容だけではない方が良い 7．英語の活動は，幼稚園から開始する方が良い 8．幼稚園での英語の活動は，小学校の前段階となる音声を中心とした活動内容の方が良い 9．幼稚園での英語の活動は，ALT などのネイティブスピーカーの先生で行われる方が良い 10．小学校受験を予定している子どもも考えると，幼稚園での英語の活動では，身近な内容と音声中心の内容だけではない方が良い 11．英語の活動は，保育園から開始する方が良い 12．保育園での英語の活動は，幼稚園の前段階となる音声を中心とした活動内容の方が良い 13．保育園での英語の活動は，ALT などのネイティブスピーカーの先生で行われる方が良い 14．幼稚園受験を予定している子どもも考えると，保育園での英語の活動では，身近な内容と音声中心の内容だけではない方が良い
自由記述式アンケート	1．2020 年度から小学校で英語の授業が増えました。一方で，現在の中学生や高校生，大学生における全ての人たちは小学校からの英語の授業は少なかったり，あるいはなかったりしていました。このような差をどのように感じますか。その差を埋めるために，どのようなことをすべきだと思いますか。文字数は考慮せず，自由に書いて下さい。 2．2020 年度から小学校で英語の授業が増えました。それに踏まえ，幼稚園や保育園でも英語の活動が生じたり，増えることが予想されます。小学校での英語の授業では，身近な内容と音声中心の内容が主となりますが，幼稚園と保育園では，それぞれどのような英語の活動をすべきだと思いますか。文字数は考慮せず，自由に書いて下さい。

見を得られやすくするため，文字数の制限の設定をしていない。大山（2021）では，「小学校英語」に関する内容のみであったため，参考にしつつも，より範囲を拡大させ，保育園，幼稚園，小学校の 3 つの保育・教育現場を想定している。

項目の背景的な内容は，2020 年度からの学習指導要領（文部科学省, 2017）において，小学校中学年 3・4 年生では「外国語活動」として，高学年 5・6 年生では「外国語科」（英語の教科化）として，英語が授業で扱われるようになっている。併せて，2020 年度からの移行期間を経て，2022 年度からは完全実施となっている。特に大山（2021）とは違い，前学習指導要領下で小学校

教諭希望，幼稚園教諭希望，保育士希望を主とし，「小学校英語」だけではなく，「児童英語」に対してどのような意見や考えがあるのかを認識する必要性は極めて高いと思われる。

2.3. アンケート結果

2.3.1. 基礎アンケート結果

まず，基礎アンケート結果である。「1.」では，小学校の先生（n=5），幼稚園の先生（n=44），保育士（n=54），なし（n=3）であった。複数回答可としていたため，複数回答していた学生もいたが，77 名のうち多くが幼稚園の先生か保育士あるいは両方を希望している。

「2.」では，「①」（n=5），「②」（n=10），「③」（n=18），「④」（n=32），「⑤」（n=12）であった。「④」が一番多いため，全体的には英語への好意は低いと考えられる。理由として考えられるのは，「情意フィルター仮説」（Affective Filter Hypothesis: AFH）（Krashen, 1982）が挙げられ，今までの英語学習において何らかの弊害を経験したためか，あるいは英語への興味・関心に繋がる経験をしてこなかったためと考えられる。

「3.」では，歌（n=32），単語（n=7），ALT（n=5），洋楽（n=4），曲（n=3），発表（n=3），文法（n=2），などが挙がった。「今まで」としたため，特に小学校や中学校，高等学校や大学などと授業を受けた場を限定せず，また「記憶に残っている」としたため，良い経験なのか，良くない経験なのかを明記していない。しかしながら，「2.」で「④」が一番多いため，今までの英語の授業において何らかの AFH の影響が生じたと考えられる。

2.3.2. 選択式アンケート結果

2.3.2.1. 大山（2021）との比較項目

次に，大山（2021）と同様の項目における選択式アンケート結果は図 2-1 である。

「1.」では，「③」（n=26）が最も多く，「②」（n=20）が 2 番目に多い。このことから，2020 年度よりも前に小学校で英語の授業を増やしてほしいと思う学生がある程度多いと考えられる。

「2.」では，「③」と「④」（n=24）が最も多く，「②」（n=13）が 2 番目に多い。このことから，小学校中学年で週 1 時間，高学年で週 2 時間が増えたことには賛成している学生が多くはないと考えられる。「①」（n=4）と「⑤」（n=12）を併せて考慮すると，小学校中学年で週 1 時間，高学年で週 2 時間が適切な週の学習時間であると考えていると解釈できる。

「3.」では，「①」（n=23）が最も多く，「②」（n=22）が 2 番目に多い。このことから，2020 年度から英語の授業では，小学校 3 年生から開始ではなく，1 年生から開始してほしいと思う学生が多いと考えられる。「2.」の結果と合わせると，小学校中学年と高学年で週の学習時間を増やすよりも，低学年に週の学習時間を増やすことを望んでいると解釈できる。

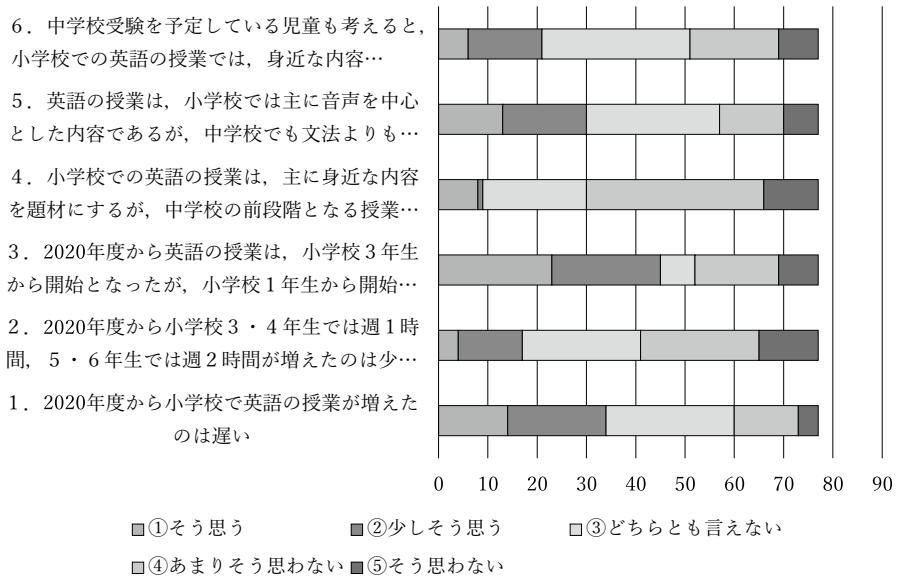

図 2-1　1から6までの選択式アンケート結果（N=77）

「4.」では，「④」(n=36) が最も多く，「③」(n=21) が2番目に多い。このことから，小学校での英語の授業では，主に身近な内容を題材にする方が良く，中学校の前段階となる授業内容ではない方が良いと思う学生が多いと考えられる。

「5.」では，「③」(n=27) が最も多く，「②」(n=17) が2番目に多い。「①」(n=13) を併せて考慮すると，小学校と同様に，中学校でも文法よりも音声を中心とした内容の方が良いと思う学生がある程度多いと考えられる。

「6.」では，「③」(n=30) が最も多く，「④」と (n=18) が2番目に多い。このことから，中学校受験も考慮しても，小学校での英語の授業では，身近な内容と音声中心の内容だけで良いと思う学生が多いと考えられる。

大山（2021）と比較すると，「1.」では，2020年度よりも前に小学校で英語の授業を増やしてほしいと思う学生がある程度多いと考えられるため，結果は類似している。「2.」では，小学校中学年で週1時間，高学年で週2時間が適切な週の学習時間であると考えていると解釈できるため，結果は異なっている。「3.」では，小学校中学年と高学年で週の学習時間を増やすよりも，低学年に週の学習時間を増やすことを望んでいると解釈できるため，結果は同一である。「4.」では，小学校での英語の授業では，主に身近な内容を題材にする方が良く，中学校の前段階となる授業内容ではない方が良いと思う学生が多いと考えられるため，結果は同一である。「5.」では，小学校と同様に，中学校でも文法よりも音声を中心とした内容の方が良いと思う学生がある程度多いと

考えられるため，結果は類似している。「6.」では，中学校受験も考慮しても，小学校での英語の授業では，身近な内容と音声中心の内容だけで良いと思う学生が多いと考えられるため，結果は同一である。

大山（2021）では，調査協力者が大学生の英語専攻と他専攻である。小学校教諭希望，幼稚園教諭希望，保育士希望を主とした場合は，結果が同一である内容と類似している内容もある。しかしながら，注目しなくてはならないのは，結果が異なっている内容である。「2.」では，小学校中学年で週 1 時間，高学年で週 2 時間が適切な週の学習時間であると考えていると解釈できるため，調査協力者が同じ大学生でも小学校教諭希望，幼稚園教諭希望，保育士希望を主としたことが要因となる可能性が高い。理由として考えられるのは，他教科などの別に重要視している教育内容があり，英語の授業だけを増やすことが出来ないと思っていると考えられる。

2.3.2.2. 本研究の独自項目

次に，本研究の独自項目における選択式アンケート結果は図 2-2 である。

「7.」では，「②」（n=24）が最も多く，「③」（n=18）が 2 番目に多い。このことから，幼稚園から英語の活動を開始してほしいと思う学生がある程度多いと考えられる。しかしながら，「①」（n=17）と「②」を合わせると 41 という半数を超える数値になるため，幼稚園から英語の活動を開始する必要性の余地はあると考えられる。

「8.」では，「①」（n=23）が最も多く，「②」と「③」（n=19）が 2 番目に多い。このことから，幼稚園での英語の活動では，小学校の前段階となる音声を中心とした活動内容の方が良いと思う学生が多いと考えられる。

「9.」では，「①」（n=31）が最も多く，「②」（n=24）が 2 番目に多い。このことから，幼稚園での英語の活動では，ALT などのネイティブスピーカーの先生で行われる方が良いと思う学生が多いと考えられる。「8.」の結果と合わせると，幼稚園での英語の活動では，小学校の前段階となる音声を中心とした活動内容を，ALT などのネイティブスピーカーの先生で行われることを望んでいると解釈できる。

「10.」では，「③」（n=35）が最も多く，「④」（n=25）が 2 番目に多い。このことから，小学校受験も考慮しても，幼稚園での英語の活動では，身近な内容と音声中心の内容だけで良いと思う学生が多いと考えられる。

「11.」では，「③」（n=27）が最も多く，「①」と「②」（n=13）が 2 番目に多い。このことから，保育園から英語の活動を開始してほしいと思う学生が少し多いと考えられる。「7.」の結果と合わせると，幼稚園から英語の活動を望んでいても，保育園から英語の活動を望んでいない学生がいると考えられる。

「12.」では，「③」（n=28）が最も多く，「②」（n=15）が 2 番目に多い。このことから，保育園

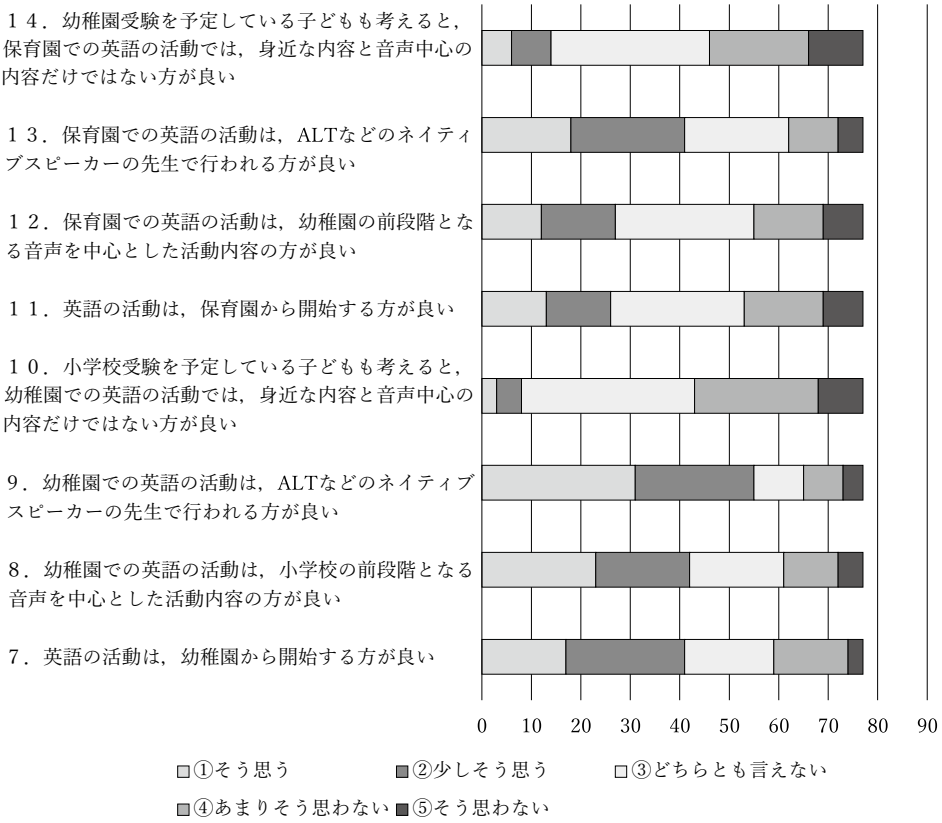

図 2-2　7 から 14 までの選択式アンケート結果（N=77）

での英語の活動では，幼稚園の前段階となる音声を中心とした活動内容の方が良いと思う学生が少し多いと考えられる。「8.」の結果と合わせると，幼稚園での英語の活動では，小学校の前段階の活動内容を望んでいても，保育園での英語の活動では，幼稚園の前段階の活動内容を望んでいない学生がいると考えられる。

「13.」では，「②」（n=23）が最も多く，「③」（n=21）が 2 番目に多い。このことから，保育園での英語の活動では，ALT などのネイティブスピーカーの先生で行われる方が良いと思う学生がある程度多いと考えられる。しかしながら，「①」（n=18）と「②」を合わせると 41 という半数を超える数値になるため，保育園での英語の活動では，ALT などのネイティブスピーカーの先生で行われることを望んでいると解釈できる。「9.」の結果と合わせると，保育園でも幼稚園でも英語の活動では，ALT などのネイティブスピーカーの先生で行われることを望んでいると解釈できる。

「14.」では，「③」（n=32）が最も多く，「④」（n=20）が 2 番目に多い。このことから，幼稚園

受験も考慮しても，保育園での英語の活動では，身近な内容と音声中心の内容だけで良いと思う学生が多いと考えられる。「10.」の結果と合わせると，近い将来の受験も考慮しても，保育園でも幼稚園でも英語の活動では，身近な内容と音声中心の内容だけで良いと思う学生が多いと考えられる。

本研究の独自項目において，「7.」と「11.」の結果を比較すると，幼稚園から英語の活動を望んでいても，保育園から英語の活動を望んでいない学生がいると考えられるため，不一致である。「8.」と「12.」の結果を比較すると，幼稚園での英語の活動では，小学校の前段階の活動内容を望んでいても，保育園での英語の活動では，幼稚園の前段階の活動内容を望んでいない学生がいると考えられるため，不一致である。「9.」と「13.」の結果を比較すると，保育園でも幼稚園でも英語の活動では，ALT などのネイティブスピーカーの先生で行われることを望んでいると解釈できるため，一致である。「10.」と「14.」の結果を比較すると，近い将来の受験も考慮しても，保育園でも幼稚園でも英語の活動では，身近な内容と音声中心の内容だけで良いと思う学生が多いと考えられるため，一致である。

幼稚園と保育園の両方を比較すると，保育園からではなく，幼稚園から英語の活動を開始することを望んでいることや，保育園では幼稚園の前段階の活動内容ではなく，幼稚園では小学校の前段階の活動内容を望んでいることから，幼稚園とは違い，保育園では特有の活動内容があり，それを優先にしていると考えられる。しかしながら，もし保育園でも英語の活動があれば，保育園でも幼稚園でも英語の活動では，ALT などのネイティブスピーカーの先生で行われることを望んでいることや，近い将来の受験も考慮しても，保育園でも幼稚園でも英語の活動では，身近な内容と音声中心の内容だけで良いと思う学生が多いと考えられることが挙げられる。

2.3.3. 自由記述式アンケート結果

次に，全体の自由記述式アンケート結果は表 2-2 である。

表 2-2　全体の自由記述式アンケート結果（N=77）

質問 1		質問 2	
文字数	人数	文字数	人数
300 文字台	2	300 文字台	1
200 文字台	2	200 文字台	3
100 文字台	32	100 文字台	22
二桁台	41	二桁台	51

大山（2021）と同様に,「記述文字数が一番多かった回答結果」を「情報量が一番多かった」と解釈し，質問 1 では 390 文字の回答を，質問 2 では 327 文字の回答を代表回答として検出した（誤字も文字数としてカウントした）結果が表 2-3 である。

表 2-3　自由記述式アンケートの代表回答

質問 1	回答 1．英語の学習活動の差は，今後の教育指導的に影響が現れると思う。
	回答 2．教師や保育者は専門家として英語活動の取り組み方について研究をするが，自らの子ども時代にえそういった活動の経験がない（または少ない）。
	回答 3．そのため，適切な活動づくりにおいて，より深い研究が必要となる。
	回答 4．また，現代社会はグローバル化しており，ICT の活用も盛んになっている。
	回答 5．そのため，仕事や活動に英語が必須であることも少なくない。
	回答 6．しかし，英語活動がなかった世代は，他言語に馴染みが薄く，すぐに取り入れられない場合もあるだろう。
	回答 7．これらを円滑に行うためには，スキルの習得に時間を割く他ない。
	回答 8．以上のように，英語活動がなかった世代現代社会の進化に追いつけなくなるという可能性がある。
	回答 9．これを改善するために，現代の英語活動や内容に触れたり，取り組むハードルが低く感じられるような教材を，インターネットを通して触れやすくすることが必要だと思う。
質問 2	回答 1．私は幼稚園，保育園での英語の活動について子どもたちが英語に対して興味や関心が持てるような活動を展開していきたい。
	回答 2．まず，英語とはたどのような言語でどのようなどの場面，地域で使われているのかを簡単に説明し，そのような地域の人たちと仲良くなるために少し英語を覚えて遊んでみようと声かける。
	回答 3．その後はりんごの絵を描いたカードの裏にその英語名を書き，子どもに示しながら「これは何？」「英語だとなんというと思う？」などのクイズ形式で展開していきたい。
	回答 4．また，ジュースやドアなど日常で子どもたち自身が使うであろう言葉も英語であることをひっかけ要素として取り入れてたりして少しずつ子どもにこれは『英語でなんていうのだろう』と疑問を持ったりし意識できるものが良い活動と考える。

2.3.3.1. 大山（2021）との比較項目

質問 1 に対して回答 1 では,「英語の学習活動の差」は「今後の教育指導的に影響が現れる」が,「教え方に変化が生じる」と解釈できる。学習活動に差が存在しているため，今後の教授法に何らかの影響が生じる危機感があると思っているようである。調査協力者全体の回答文字数からも，変化（n=4），変（n=8），教え（n=4），影響（n=1）であったため，裏付けられると考えられる。

質問 1 に対して回答 2 では,「教師や保育者は専門家として英語活動の取り組み方について研究をする」けれども「自らの子ども時代にそういった活動の経験がない（または少ない）」が,「実体験を踏まえた活動が出来ない」と解釈できる。低年齢化が進む以前に教育を受けた場合は，目の前の子ども達と昔の自分とを比較できないと思っているようである。調査協力者全体の回答文

字数からも，昔（n=5），経験（n=1），比較（n=1）であったため，裏付けられると考えられる。

質問 1 に対して回答 3 では，「適切な活動づくり」において「より深い研究が必要となる」が，「新しい教育方法の必要性」と解釈できる。今までの教育方法では学習活動の差を生む結果となってしまったため，今までにはない教育方法が必要であると思っているようである。調査協力者全体の回答文字数からも，必要（n=35），違う（n=4）であったため，裏付けられると考えられる。

質問 1 に対して回答 4 では，「現代社会はグローバル化」して「ICT の活用も盛んになっている」が，「今までにない教育方法が可能である」と解釈できる。Wi-Fi などのネット環境の整備を踏まえ，五感で英語を学べる程のグローバル化した英語教育が現代の英語教育であると思っているようである。調査協力者全体の回答文字数からも，グローバル（n=5），国際（n=1），インターネット（n=2），ネット（n=3）であったため，裏付けられると考えられる。

質問 1 に対して回答 5 では，「仕事や活動」に「英語が必須である」が，「様々な場で英語が必要である」と解釈できる。指導者は単純に英語の授業が出来れば良いのではなく，あらゆる場において英語を使うことが大切であると思っているようである。調査協力者全体の回答文字数からも，英語（n=149），仕事（n=5），活動（n=9），全て（n=3），全（n=6）であったため，裏付けられると考えられる。

質問 1 に対して回答 6 では，「英語活動がなかった世代」は「他言語に馴染みが薄く」「すぐに取り入れられない場合もある」が，「慣れるには時間を要する」と解釈できる。現在の指導者は既に自分自身の学びや体験から得た自分流の教授法を心得ているため，別の教授法を習得するには疑問などが生じて時間が掛かると思っているようである。調査協力者全体の回答文字数からも，時間（n=7），時（n=22），間（n=8）であったため，裏付けられると考えられる。

質問 1 に対して回答 7 では，「円滑に行う」ためには「スキルの習得に時間を割く他ない」が，「スキル向上を日々意識することが大切である」と解釈できる。授業時間という限られた時間内で年間授業計画から 1 時間毎の授業計画と到達目標を達成するためには，日頃から自分自身の英語能力・技能を磨く必要があると思っているようである。調査協力者全体の回答文字数からも，授業（n=45），スキル（n=1），英語力（n=1）であったため，裏付けられると考えられる。

質問 1 に対して回答 8 では，「英語活動がなかった世代」は「現代社会の進化に追いつけなくなるという可能性がある」が，「熟練の指導者こそが初心を思い出さなければならない」と解釈できる。指導者から学ぶ英語が子ども達が必要とする英語である。現代社会に合った教授法でないと当時の子ども達のままの成長になってしまうと思っているようである。調査協力者全体の回答文字数からも，今（n=34），思い（n=61），初心（n=1）であったため，裏付けられると考えられる。

質問 1 に対して回答 9 では，「差」を埋めるためには，「現代の英語活動や内容に触れる」ことをしながら「取り組むハードルが低く感じられるような教材」を「インターネットを通して触れ

やすくする」と解釈できる。PC を使いながら，子ども達の興味・関心のある内容で英語に触れることが大切であると思っているようである。調査協力者全体の回答文字数からも，現代（n=3），触れる（n=2），低く（n=1），低（n=3）であったため，裏付けられると考えられる。

大山（2021）では，「好奇心旺盛な小学生なら大丈夫」であるとの分析結果が挙げられている。「日本語に囲まれた生活を続ければ続けるほど外国語への抵抗感が増す」ため，「その前の素直に英語という学習を受け入れられる子どもの時期」に「勉強しておいた方がより知識を吸収することが可能」であるとの分析結果も挙げられている。「簡単な英会話くらいを小 5・6 年生でやっただけの人」には，「純粋な頭で難しく考えすぎない小学生の時期」に「実用的な英語を教えてもらえる」ことは「とても羨ましい」と考えられている。また，「小学生は何事にも興味を示す」ため，「中学校のように定期試験という縛りが無い」ことや「みんなで楽しく学習できる」ことで，「中学校から本格的に英語を習い始めた人たちよりも圧倒的に英語の理解力は高い」とも考えられている。「差」を埋めるためには，「日本人に欠けているとよく言われている」「リスニング力を上げる必要がある」と解釈されている。一方，本研究では，「教え方に変化が生じる」ことになっても，「実体験を踏まえた活動が出来ない」ため，「新しい教育方法の必要性」を基にすれば，「今までにない教育方法が可能である」と考えられる。また，「慣れるには時間を要する」ため，「スキル向上を日々意識することが大切である」とも考えられる。この「スキル向上を日々意識することが大切である」一方，「熟練の指導者こそが初心を思い出さなければならない」はずである。「差」を埋めるためには，「現代の英語活動や内容に触れる」ことをしながら「取り組むハードルが低く感じられるような教材」を「インターネットを通して触れやすくする」と解釈できる。

大山（2021）と比較すると，本研究は学習者視点ではなく，指導者視点であることが垣間見られる。前者は調査協力者が同じ大学生でも英語専攻と他専攻であり，後者は小学校教諭希望，幼稚園教諭希望，保育士希望を主としている。特に，小学校教諭希望，幼稚園教諭希望，保育士希望であれば，今までの自分自身の経験を基に，良い経験であればそうなろうと良い手本として考え，良くない経験であればそうならないようにしようと良くない手本として考えるのが当然である。このような点において結果が同一ではない要因となる可能性が高い。

2.3.3.2. 本研究の独自項目

質問 2 に対して回答 1 では，「幼稚園，保育園での英語の活動」について「子どもたちが英語に対して興味や関心が持てるような活動を展開する」が，「幼稚園と保育園は同じように子どもの興味や関心が持てる活動が大切である」と解釈できる。幼稚園の前段階である保育園でも同様の活動内容で，子ども達の興味・関心のある活動が望ましいと思っているようである。調査協力者全体の回答文字数からも，興味（n=4），関心（n=2），積極的（n=1）であったため，裏付けられると考えられる。

質問２に対して回答２では,「英語とはどのような言語でどのような場面や地域で使われているのかを簡単に説明」して,「地域の人たちと仲良くなる」ために「少し英語を覚えて遊んでみようと声かける」が,「英語を使う人たちと仲良くなる」ために「英語を覚える」ことから「英語で遊ぶ」と解釈できる。英語ということばが日本語とは違うことを説明し，友達作りの一環として英語を覚えて，覚えた英語を使って遊ぶという流れが良いと思っているようである。調査協力者全体の回答文字数からも，英語（n=139)，覚える（n=2)，覚え（n=11)，遊ぶ（n=1)，遊（n=18）であったため，裏付けられると考えられる。

質問２に対して回答３では,「りんごの絵を描いたカードの裏に英語名を書く」ことで,「子どもに示しながら英語で回答させるクイズ形式を展開する」が,「裏面に英語名が書かれたピクチャーカードを使う」ことで「想像しやすい内容で楽しく英語を学ぶ」と解釈できる。「小学校英語」では音声指導で音と絵・イラストから意味に結び付かせる指導のため，その前段階として楽しい活動が望ましいと思っているようである。調査協力者全体の回答文字数からも，絵（n=9)，イラスト（n=6)，楽しい（n=13)，楽しく（n=20）であったため，裏付けられると考えられる。

質問２に対して回答４では,「ジュースやドアなど日常で子どもたち自身が使う言葉が英語である」ことも教えながら,「少しずつ英語でどういうのかと疑問を持たせる」ことで「英語を意識できる活動が良い」が,「カタカナ英語から英語に慣れさせる」ことから「英語への疑問を意識的に出来るようにさせる」と解釈できる。子ども達の年齢であれば音声知覚は鋭いため，カタカナ英語と英語の発音の違いに気付きやすく，日常的に英語で表現させるための疑問を意識化することが大切であると思っているようである。調査協力者全体の回答文字数からも，音声（n=12)，発音（n=15)，音（n=35)，意識（n=4）であったため，裏付けられると考えられる。

本研究の独自項目において，幼稚園と保育園での英語の活動内容は同一のもので良いようである。その理由として,「小学校英語」を想定していないためではないだろうか。小学校とは違って義務教育下ではない「幼稚園と保育園は同じように子どもの興味や関心が持てる活動が大切である」ため,「英語を使う人たちと仲良くなる」ために「英語を覚える」ことから「英語で遊ぶ」ことが必要である。「裏面に英語名が書かれたピクチャーカードを使う」ことで「想像しやすい内容で楽しく英語を学ぶ」大切さを感じさせて,「カタカナ英語から英語に慣れさせる」ことから「英語への疑問を意識的に出来るようにさせる」ことが妥当であると解釈できる。

3. アンケート分析

基礎アンケート結果，選択式アンケート結果，自由記述式アンケート結果を基に，第一に挙げられることは，保育園，幼稚園，小学校という一連の英語学習の捉え方に相違が見られるという

ことである。今後の小学校の英語授業を想定する場合，前段階での幼稚園の英語活動はなるべく見据えた内容が良いと捉えられるが，保育園の英語活動は見据える必要はないという傾向が垣間見られる。一方，今後の小学校の英語授業を想定しない場合，前段階での保育園と幼稚園の英語活動は同一の内容でも差し支えないという傾向が考えられる。この「小学校英語」を見据えるかどうかで「幼稚園と保育園での英語活動の内容の類似性と相違性」が生じる要因は，小学校と違って「幼稚園と保育園は義務教育下ではない」という点が挙げられる。義務教育ではない分，「全ての子どもに提供する必要のある教育内容」とはならないためであると考えられる。

加えて，幼稚園教諭免許課程には英語を必修科目として設置しているが，保育士免許課程には英語を必修科目として設置していない点も挙げられる。幼稚園の教育内容が小学校の教育内容を必ずしも前提としているわけではないが，小学校と同様に幼稚園は文部科学省下で教育が施行されている。一方，保育園は厚生労働省下で教育が施行されている。保育園の教育内容は幼稚園の教育内容を前提にせず，「英語はあくまでも選択肢の一つ」と扱われているのではないだろうか。そのため，幼稚園と保育園での教育内容に違いが生じないように「こども園」（認定こども園や総合こども園）があると考えられる。管轄になる省が異なるために教育内容が異なると，保育園を卒園した子どもが幼稚園に入園した際に「学習への障害が生じる可能性」を考慮しなくてはならない。換言すれば，「英語の学習開始年齢が異なる」ことが考えられる。アンケート結果から，保育園でも幼稚園でも英語の活動では，ALT などのネイティブスピーカーの先生で行われることを望んでいることや，近い将来の受験も考慮しても，保育園でも幼稚園でも英語の活動では，身近な内容と音声中心の内容だけで良いという回答が多かったことを踏まえることが妥当である。

大山（2021）では，「母語習得論」（First Language Acquisition）や「第二言語習得論」（Second Language Acquisition）の分野から「小学校英語」に関する研究を論じ，子どもの時期からこその「体験して習得すること：体得」（Experiential Acquisition）（大山, 2020a）の言及がある。本研究では，「教育音声学」（Pedagogical Phonetics）（Togo, 1999）の分野から考察すると，「文字とは違って音声は目に見えない」ものを習得するには早い段階で音声に慣れさせる必要がある。この考え方は「母語習得論」や「第二言語習得論」でも取り上げられているものであり，習得する際の「干渉」（Interference）のない時期が望まれている（Ohyama, 2021）。換言すれば，英語の音声に関しては「生の音声を純粋に聞く」ことが出来る時期が一番効率的であるということである。アンケート結果における保育園でも幼稚園でも英語の活動では，ALT などのネイティブスピーカーの先生で行われることを望んでいることにも起因している。

同時に，現代版の「連接」（Juncture）研究（大山, 2013; Ohyama, 2016; 大山, 2017）における仮説の１つである「音声優位性仮説」（Sound Superiority Hypothesis: SSP）（大山, 2015）を基に「音声は文字以上の情報を含んでいる」ため，音声を聞いて文字に変換してからでないと意味に辿

り着かないという聞き方ではなく,「小学校英語」の音声指導から文字指導への移行を想定するように,「音声を聞いて絵・イラストを見て意味を理解してから文字に辿り着く」という聞き方がリスニング力向上にも繋がる教授法である。特に，全ての五感に関するインプットに敏感な子ども達には望ましい活動内容となり得る。よって,「教育音声学」を考察した場合，幼稚園と保育園での英語の活動に違いが生じないようにすることが最良であると考えられる。

以上を踏まえると,「児童英語教育」を基にした「英語コミュニケーション」の試案は表3のようになる。

表3 「英語コミュニケーション」を基にしたカリキュラム開発の試案

1．教育内容に関する留意点…
「幼稚園と保育園での英語活動の内容の類似性と相違性」
※「幼稚園と保育園は義務教育下ではない」ため,「英語はあくまでも選択肢の一つ」と捉えずに「全ての子どもに提供する必要のある教育内容」を検討する
2．教授法に関する留意点…
「学習への障害が生じる可能性」
※「英語の学習開始年齢が異なる」ため，その差を埋められるようなインプット量を提供する
3．教材に関する留意点…
「生の音声を純粋に聞く」
※「音声は文字以上の情報を含んでいる」ため,「音声を聞いて絵・イラストを見て意味を理解してから文字に辿り着く」ことを念頭に置く

これら3点を留意することで「初等英語科教育法」における「英語コミュニケーション」の意義が明確化されていると考えられる。特に，保育園，幼稚園，小学校の3つの保育・教育現場を想定していることは画期的である。大山（2021）と同様に，一見すると演繹的な指導ではあるが，学習者からは内在化された帰納的な指導でもあるとする「内在化されたアクティブ・ラーニング」(Internalized Active Learning: IAL)（大山, 2020b）を踏まえると，それぞれの留意点が結果として学習への動機付けが生じることに繋がることは明確である。

4. 結　論

「児童英語教育」において如何にして「英語コミュニケーション」が必要であるのかを提唱してきた。英語のコミュニケーションスキルを習得するための「初等英語科教育法」において，学生が保育園，幼稚園，小学校で学びたかった「児童英語」は，どのようなものであるのかを認知する必要性が考えられる。アンケート調査を基に,「教育音声学」の視点から，保育園から，幼稚園，小学校への言語学的繋がりとして働き掛けることが可能であると考えられる。

大山（2021）との比較から,「小学校英語」だけではなく，幼稚園と保育園の英語活動も視野に

入れたため，「児童英語」を対象とした研究としては画期的であると考えられる。特に，「教育音声学」での「文字とは違って音声は目に見えない」点や「音声は文字以上の情報を含んでいる」点を考慮することが「初等英語科教育法」に結び付く内容になっている。

本研究では，「児童英語」を広義的に解釈し，「小学校英語」も踏まえ，「保育英語」（Childcare English）と「幼児英語」（Toddler English）の分野を併せて検討した。しかしながら，狭義的に解釈する場合，「子ども英語」（English to Children）として位置付けられるこれら 4 つの英語の明確な定義が必要であり，それぞれにおける相互的な関係性を踏まえることも大切である。

今後の改善点としては，アンケート協力者の大学生の回答結果は，基礎アンケートだけではなく，選択式アンケートでは 5 段階評価と，自由記述式アンケートでは代表回答を採用した。よって，大山（2021）での基本統計量（標本数，平均値，中央値，最頻値，標準偏差）を基にした比較を含め，より詳細な分析（統計分析を含む）が必要である。また，英語力の差による結果も考えられるため，今後の継続的な研究も必要である。

今後の幼稚園・保育園における英語活動と小学校における外国語活動・外国語科での活性化を目指すためには，AFH，「体得」，SSP，IAL を考慮しつつ，多角的な検討をし，共存してゆく必要がある。本研究の方法が今後の「児童英語教育」への寄与に貢献できると考えられる。

参考文献

Krashen, S. (1982). *Principles and Practice in Second Language Acquisition*. Oxford: Pergamon.

文部科学省. (2017).『小学校学習指導要領解説　外国語活動・外国語編』. https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_011.pdf

大山健一. (2013).「連接」の物理的特性と教育的効果.『語学教育研究論叢』, 大東文化大学語学教育研究所, 30, 35-48.

大山健一. (2015).「連接」の三項目比較研究.『創設 30 周年記念フォーラム』, 大東文化大学語学教育研究所, 30, 185-197.

Ohyama, K. (2016). Aspiration Juncture Effects between Three Perception Cues. *Journal of English Phonetic Society of Japan: English Phonetics*, 20, 85-93.

大山健一. (2017). 現代版「連接」の言語学的・教育学的意義.『英文学思潮』, 青山学院大学英文学会, 90, 73-79.

大山健一. (2020a). 小学校英語における言語習得論の意義.『川口短大紀要』, 34, 111-115.

大山健一. (2020b). 英語教育における e ラーニングの意義.『埼玉学園大学紀要』人間学部篇, 20, 345-349.

大山健一. (2021). 小学校英語における英語コミュニケーションの意義.『川口短大紀要』, 35, 219-230.

Ohyama, K. (2021). Phonetic Relation between First and Second Language Acquisition. *Bulletin of Saitama Gakuen University, Faculty of Humanities*, 21, 253-258.

Togo, K. (1999). *A Study of Pedagogical Phonetics*. Tokyo: Otowashobo-Tsurumishoten.

（提出日：2022 年 9 月 22 日）